
 学 会 記 事

第 14 回新潟 GHP 研究会

日 時 平成 24 年 2 月 25 日 (土)
午後 3 時～
会 場 ANA クラウンプラザホテル新潟

I. 一 般 演 題

1 治療抵抗性統合失調症の体感幻覚に対してブロ ナリンセリンが有効であった 1 例

井桁 裕文・須貝 拓朗・染矢 俊幸
新潟大学医歯学総合病院精神科

【はじめに】ブロナンセリンは日本で創薬された非定型抗精神病薬であり、ドパミン D2 受容体、セロトニン 5-HT_{2A} 受容体に対する遮断作用を有している。2008 年に厚生労働省の承認を受け、統合失調症の治療に使用されているが、海外で承認されている国が少なく、臨床データも他の抗精神病薬に比べて乏しいのが現状である。今回我々は、体感幻覚と心気妄想を呈し、他の抗精神病薬で効果不十分であった統合失調症患者に、ブロナンセリンが有効であった症例を経験したので報告する。

症例は 29 歳、男性。X 年 4 月から跡継ぎのため寺での修行を開始したが、人間関係や修行内容を苦痛に感じ、7 月 27 日に自身の腹部を包丁で刺し A 病院で手術を受けた。7 月 30 日に A 病院精神科を初診し、適応障害、回避性パーソナリティ障害の診断で通院は不要となった。しかしその後、腹部の違和感が持続し 9 月 3 日から 10 月 6 日まで A 病院精神科に入院。クエチアピン 25mg にて腹部違和感はやや改善したが、嘔気により内服自己中断し 11 月 8 日に終診となった。しかしその後、手術部位が固まって呼吸が重い、体中の

血管が動く、など体感幻覚、心気妄想が出現した。X + 1 年 3 月 17 日からオランザピン max 15mg が開始され、体感幻覚は若干改善したが、心気妄想は持続した。9 月 15 日に体感幻覚増悪し、自傷行為を認め入院となった。統合失調症と診断され、アリピプラゾール max 30mg, パリペリドン max 12mg が使用されたが症状は改善しなかった。11 月 23 日からブロナンセリンが開始され、次第に体感幻覚が軽減し、外泊に出ることも可能となっている。

【考察】本症例は体感幻覚、心気妄想が主症状であり、オランザピン、アリピプラゾール、パリペリドンにていずれも効果不十分であった治療抵抗性の統合失調症である。ブロナンセリンを開始したところ、心気妄想は持続しているものの、難治性であった体感幻覚に対して有効であった。他のいくつかの報告でも、ブロナンセリンが幻聴や体感幻覚に有効であった症例が散見されており、今後さらなる研究が望まれる。

2 プレガバリンが有効であった鑑別不能型身体表現性障害の 1 例

湯川 尊行・須貝 拓朗・福井 直樹
染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院精神科

プレガバリンは、海外および本邦の各ガイドラインにおいて神経障害性疼痛に対する第一選択薬のひとつとして位置づけられており、本邦において 2011 年より末梢性神経障害性疼痛に対して適応を有している。プレガバリンは Ca²⁺チャンネルの $\alpha 2\delta$ サブユニットに結合し、興奮性神経伝達物質の過剰放出を抑制することにより、鎮痛作用を発揮するとされている。海外では神経障害性疼痛に加え、てんかん、線維筋痛症、全般性不安障害が適応症として承認されており、不安障害や睡眠障害に対する効果も認められている。

DSM-IV-TR における鑑別不能型身体表現性障害の概念は身体疾患では説明困難な身体的愁訴であり、疼痛性障害の概念は、身体疾患の有無